

第15回「鹿屋杯」プロジェクトを振り返って

前阪茂樹（鹿屋体育大学教授 剣道部顧問・総監督）

I. はじめに

元号が平成から令和に変わり第15回目の「鹿屋杯」全国高等学校選抜剣道錬成大会が開催された。本大会の歴史は国立大学の法人化と歩みを共にしている。以降、大学はその教育・研究の成果を如何に地域社会に還元・貢献できるかということが問われ続けているが、本プロジェクトは、本学創設の趣旨の一つである「武道の振興」について、国立大学で唯一の武道課程を持つ本学の課外活動も含めた専門教育の成果について、学生が主体となり全国規模に近い大会の企画・運営等について報告するものである。

II. 専門教育と課外活動との関わり

武道課程剣道専門教育は課外活動も含めて「表裏一体」型を目指している。つまり、課外活動の部員構成と専攻科目の受講生、指導者と授業担当者がほぼ一致し、これらの活動を通して剣道の実技力及び審判技術の向上や大会運営能力の習得などを目標に授業計画を立て、毎日の課外活動と密接に連携を保ちながら武道・剣道についての「学び」の場を構成している。

III. 本大会を開催する意義・目的

本大会開催の主な意義・目的は以下のとおりである。

1. 本学武道課程（剣道）教育の独自性と社会貢献のあり方。
2. 少子化に伴う大学全入時代に対応した広報活動。
3. 卒業生を含む指導者や高校生との相互研修の「場」の構築。
4. 剣道部独自のオープンキャンパス効果。

IV. 本大会の歴史と概要

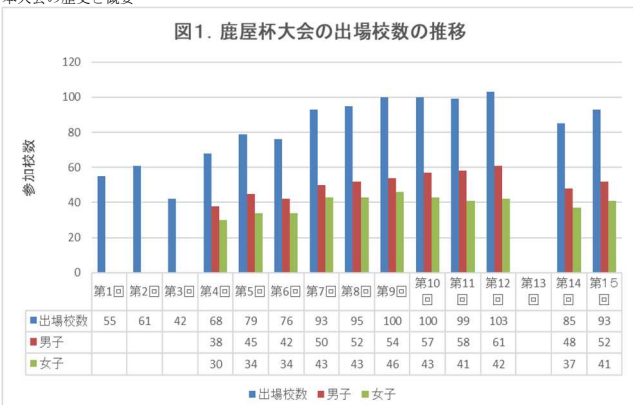


図1はこれまでの大会出場校数の推移である。今回（15回大会）は男女合わせて93校の参加がみられ、一昨年に比して若干増加した。

筆者は第1回より大会の開催に関わり、第4回大会から責任者（大会会長）として常に大会の意義と実際の課題などを見直し改善を図ってきた結果、出場校数の推移は概ね順調だと考えられる。第1～3回大会までは8月開催で場所も鹿屋市体育館及び武道館で行っていたことや、夏場の熱中症はじめ安全対策に懸念を残していた。開催期間も3日間で講習会（1日目）、稽古会（2日目）、試合（3日目）の錬成内容となっており、試合も男女とも団体、個人試合両方に対応していた。

当時から振り返ると、第1～2回大会は大学のプロジェクトではなく、剣道部の自主開催であったこと。第1～3回までの講習内容が毎年変化を見たこと、大会出場チームの構成方針が決定していなかったことなど大会のコンセプトが固まっておらず課題も多かったように思われる。このことは出場チーム数の推移にも影響（55→61→42）したと考えられる。

第4回大会以降、大学の重点教育プロジェクト化に加え、文部科学省や鹿屋市、鹿屋市教育委員会にも後援要請を求め、今日の大会運営に至っている。大会の概要は、開催期日を8月から9月開催へ、期間を3日から2日開催へ、錬成内容を本学剣道部との合同稽古会と「鹿屋杯」本大会とした。また、会場を稽古会では本学の武道館、大会は串良平和アリーナでの開催とし、試合は男女とも団体試合のみとした。更に第4回大会からは男女の団体戦優勝チームには「文部科学大臣賞」が付与される。このように鹿屋杯大会は第1回大会からそのコンセプトに見合うような内容を常に模索しつつ、その都度バージョンアップを試みて対応してきた。

V. 第15回大会について

第15回大会の準備及び概要は以下のとおりである。

1. 大会に向けての学生審判研修会



従来、大会開催前には学生審判研修会を行なっている。今回は9月10日、13日に審判研修会を行ない特に前日（13日）の研修会ではリハーサルも兼ねて行なった。

主な審判研修内容は、有効打突、特に見極めづらい相打ちの判定などについて入念に行い、合わせて高体連申し合わせ事項である禁止行為について集中的に研修を行なった。特に、引き技の場面において、罅ぜり合いからの分かれ際の打突は禁止だが、その分かれ際が「分かれようとしたところ」なのか「技を出そうとする動作」なのかの見極めが実際には困難であり、公式の大会においてもまさに勝負の分かれ目になっているのが多いため、「学生審判だから今は仕方ない」といった妥協の声が聞かれることが無いように試合における全ての事象を適正公平に判断処理し、審判員として大会に臨む姿勢・態度を最終的に詰めて大会本番に備えた。

2. 稽古錬成の部

本大会前日9月14日（土）に、鹿屋体育大学武道館において、参加希望の高校生と本学剣道部員（大学生）との合同稽古錬成を開催した。詳細は以下の通りである。

大学生と高校生の稽古錬成会

場 所	鹿屋体育大学武道館
時 間	14:00～16:00
練 成 内 容	鹿屋体育大学剣道部員と鹿屋杯参加高校生との合同稽古
学 生 参 加 者	本学代表として対外試合に今年度出場した者、及び出身校が本稽古錬成に参加する者、剣道セミナーⅢを受講している者
タイムテーブル	14:00～ 集合、諸注意、準備運動 14:15～15:00 稽古錬成Ⅰ 15:15～16:00 稽古錬成Ⅱ 挨拶・終了

稽古について：

	剣道場（本道場）	多目的道場（サブ道場）
稽古錬成Ⅰ	元立ち：指導者、OB・OG 掛かり手：大学生、高校生	元立ち：4・2年生 掛かり手：高校生
稽古錬成Ⅱ	同上	元立ち：3・1年生 掛かり手：高校生

- * 大学生元立ちは、常時25名（男子15名、女子10名）は元立っており、
- * 先生や卒業生に掛かるときは、必ず代役を立てること。



第4回大会より本学武道館で合同稽古会を開催してきた。稽古会は原則自由参加で、指導者、高校生、OB・OG、保護者ら約250名が道場の「魂」とした雰囲気の中、本学剣道部員たち（選抜された約50名）と共に汗を流した。その姿は剣道部独自のオープンキャンパスの様相を呈している。剣道を含め武道の競技スポーツ化が加速的に進む昨今、「試合」以上に「稽古」を重んじた古き良き伝統の風潮はまだまだ剣道人の中に底流としてあるのだということが認識でき、嬉しく感じた。やはり剣道は競技スポーツの側面を第1義とするよりも、稽古による自己の心身鍛錬を第1義とするのが伝統文化としてあり方であると感じた。

3. 試合錬成の部

第15回大会は9月15日に串良町平和アリーナで開催され、男女合わせて93校が参加して互いに鏢を削って行われた。開会式の進行については学生主体で、予定通り9時より開会式を行い、大会会長（筆者）挨拶のあと、本学の松下学長による歓迎の挨拶、鹿屋市長の挨拶、審判長説示、選手宣誓と続き、日本刀（刀引き）を用いたの日本剣道形演武と続いた。今回は、本学男子主将・副主将、女子主将・副主将による同時演武を行った。このような姿を高等学校側や保護者に見せることも本学の武道・剣道教育の成果の一つと考えている。

試合は8試合場に分かれ、女子予選リーグ、男子予選リーグ方式で各校2試合ずつ行い、2戦2勝勝上がり方式で予選通過とした。また、参加校には、全国レベルの高校も多数参加しており、鹿児島県内の伝統・強豪校以外の、特に大隅半島の高校生や見学に来ていた小学・中学生たちにとって、全国レベルでの高校生の剣道を実際に観たことも剣道・武道の普及・振興と併せて地域貢献の意義があると感ずる。

予選を勝ち抜いた高校間で抽選会の後に決勝トーナメントによる対戦を行なった。トーナメント上位進出校には全国・九州の強豪や男女ともに全国優勝経験のある学校が勝ち上がってきた。男子決勝は福岡大学付属大濠高等学校（福岡県）と育英高等学校（兵庫県）が進出し、熱戦の末、育英高等学校が優勝した。女子決勝は、三葉高等学校（佐賀県）、と筑紫台高等学校（福岡県）が進出し、三葉高等学校が優勝し、二連覇を飾った。

大会結果報告は本学の広報やYouTubeにも掲載されている。



VI. おわりに

「教育」「研究」「社会貢献」、この3つのキーワードは大学の果たすべき役割を集約している。特に体育系の大学においてはまず第1に現役学生の活躍が目目される。次にそれらの学生たちはどのような教育を受けて成長したかに繋がり、そしてどのような人材となって卒業し、OB・OGとなって社会的に活躍して（できて）いるかが最終的に問われるものと推察する。

この「どのような教育を受けて成長していくか」の過程の一端を武道課程剣道専攻学生が主催する大会の運営等を通して高校側や保護者の方々にも実際にみってもらうことで、本学の教育に対する理解が得られるものとする。特に武道教育は授業と部活動が表裏一体となって初めて成果を出せるものであり、それらを「修証一如」として深化させていくことが、本学武道課程剣道（部）としての社会貢献の方向性であると考える。

最後に、鹿屋杯大会のプロジェクトを推進するにあたり、後援を頂いた文部科学省、鹿屋市及び鹿屋市教育委員会、そして、学長はじめ大会関係者全員に対して感謝・敬意を表し、本稿を重点プロジェクト報告とさせて頂きます。

資料等

- ・ 前阪茂樹, 武道課程を持つ体育大学としての社会貢献 ～「鹿屋杯」全国高等学校選抜剣道錬成大会の開催を通じて～, 鹿屋体育大学学術研究紀要 39, 47-52, 2009
- ・ 月刊剣道日本, スキージャーナル株式会社, 第33巻第10号通巻392号, p106
- ・ 鹿屋杯実行委員会, 「鹿屋杯」全国高等学校選抜剣道錬成大会 大会プログラム第4～第15回
- ・ 前阪茂樹, 第14回「鹿屋杯」プロジェクトを振り返って, 鹿屋体育大学若天祭重点プロジェクトポスター発表